

「治らない」時代の医療者心得帳

カスガ先生の答えのない悩み相談室



著：春日 武彦

四六判 頁 196 2007 年
定価 1,470 円(本体 1,400 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00519-7] 医学書院刊

「人間は究極の生物兵器である」と私が言っても、仕事場で、家庭で、そういった事例を嫌というほど経験しているあなたは決して驚かないだろう。その究極の生物兵器自身が、病気や怪我になったら、医師がその手当てを担当する。つまり、医師とは、手負いとなって攻撃力が高まった究極の生物兵器と常に対峙せねばならない商売である。

通常、血を吐いただけの、骨が折れただけのといった体の傷への対応については、われわれはしかるべき訓練を受けている。対応マニュアルも、医学書院をはじめとする出版社から数多く出ている。ところが、究極の生物兵器たる所以の「感情、言語、行動」に対しては、われわれはきわめて貧弱な装備しか持ち合わせていない。

究極の生物兵器が仕掛ける攻撃がやっかいな理由は山ほどある。まず、弾が飛んでくる方向が一定ではない。病者本人やその家族はもとより、同僚、上司、部下、ひいては自治体議員や地元マスコミからの攻撃に晒されることもある。それでも、直接に自分目がけて来るだけならまだいい。とんでもない方向から流れ弾が飛んでくることもしょっちゅうだ。

ところが、究極の生物兵器から受けた心的外傷の自覚症状は、意外にもしばしば軽い。なんのこれしきでその場を凌ぎ、身体疾患の治療に注意力を集中してしまう。ブラックジャックに憧れ、あるいは救急救命室のエースよろしく、5 ラウンド

あたりまで頑張ったとしても、ボディブローのように反復される心的外傷の結果、不幸にも戦線離脱と相成るケースが後を絶たない。

かくして、この種の心的外傷が、医療現場における離脱兵の増加、ひいては戦線崩壊の最大の原因になっている。私も、現場に出た途端、究極の生物兵器の怖さを思い知った。しかし、私のとった行動といえば、砲声に耳を塞ぎ、ひたすら逃げ回ることだけだった。

本書は、究極の生物兵器対策を説いている。とはいっても、派手な迎撃ミサイルの類はいっさい登場しない。著者が示すのは、やり過ごし、肩すかし、放置、武装解除といった、一見敗北主義に見える戦略である。

一方、本書に採用された質問者の年齢は多くが二十代で、一部三十代前半が混じっている。本書を通読しても、同様の比較的若い年齢層を読者として意識していることが伺われる。しかし、この年齢層のうちいったい何割が、上記のような戦略を自分だけで理解し、実践できるのか、疑問が残る。

究極の生物兵器対策としての本書を有効活用するためには、本書を研修医だけに独占させるべきではない。

医療現場由来の心的外傷の深さは、経験年数と正の相関関係がある。究極の生物兵器の怖さを嫌というほど知っている指導医、あるいはそれよりも年上の医師が本書を手にとれば、自分の傷の受傷機序や、対処法、その後の経過が自験例として想起される。それが本書への共感を生み、みずからの傷を教育の糧として研修医と共有したいと思うだろう。手柄話なら聞かされるほうはたまったものではないが、現場で受けた傷の話、それも自験例となれば、話すほうも聞くほうもおのずから真剣勝負となる。

かくして本書は、年齢、性別に関係なく、医療現場で究極の生物兵器対策に悩む人々に共通した学習資源となる。